



# <研究ノート> 計量的手法による承認の実証的研究の可能性 : フランクフルト学派における経験的研究と日本の社会意識論の系譜から

著者	智原 あゆみ
雑誌名	関西学院大学先端社会研究所紀要
号	17
ページ	59-66
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028681">http://hdl.handle.net/10236/00028681</a>

■ 研究ノート ■

## 計量的手法による承認の実証的研究の可能性 ——フランクフルト学派における経験的研究と 日本の社会意識論の系譜から——

智 原 あゆみ\*

### 1. はじめに

本稿の目的は、現代日本社会における承認をめぐる問題を実証的に捉える枠組みについて、フランクフルト学派の経験的研究と日本における社会意識論の系譜の確認を通して検討することである。

現在、日本社会では少子高齢化や未婚率の上昇に伴う孤立の問題、SNS 上での他者とのつながりに関する問題など、人間関係に関する問題が関心を集めている。その人間関係を議論するにあたり、「承認」が注目されている。しかし、実際に人々が承認をどのように感じ／生きているのかといった、その実態に関してはあまり検討がなされてきていない。

学問分野において、承認は 1990 年代初頭から欧米圏を中心に議論が展開されてきた。承認論の代表的な研究者の 1 人がアクセル・ホネットである。ホネットはフランクフルト学派の第 3 世代に位置づけられる社会哲学者であり（藤野 2012）、ヘーゲルの思想をもとに、それを社会心理学者のジョージ・ハーバート・ミードの議論を引用しそれを発展する形で自身の承認論を展開してきた（Honneth 1992=2014）。ホネットの承認論では、ヘーゲルやフランクフルト学派によって展開された研究に基づき承認に関する体系的な理論が示されており、その理論枠組みは現代日本社会における承認の問題を捉える際にも有効なアプローチになると考えられる。

本稿では、まずフランクフルト学派の研究系譜を経験的研究に注目したうえで振り返る。次に日本の社会意識論に着目し、フランクフルト学派との共通項を確認する。最後に、現代日本社会の承認をめぐる問題を捉える際に、承認を社会意識として捉え、それをホネットの承認論を用いて検討していくことの有効性を示す。

### 2. フランクフルト学派における社会哲学と経験的研究

#### 2.1 社会研究所の設立

フランクフルト学派は、フランクフルトの社会研究所を中心に集った人々によって展開された思想・研究活動に関する総称である。社会研究所（以下、研究所）は、フェリクス・J・ワイルによって「社会研究のための研究所」（Jay 1973=1975:6）として 1923 年に設立された<sup>1)</sup>。研究所では

---

\* 関西学院大学社会学研究科大学院研究員・先端社会研究所リサーチ・アシスタント

1) フランクフルト学派に関する歴史的な背景に関する記述は、特別な言及がない場合には『弁証法的想像』

ワイルの関心から、マルクス主義が研究所の思想の中心に置かれ、それに基づき研究を進めることが目指された。

1923年の研究所設立時には、初代所長にカール・グリュンベルクが就任した。グリュンベルクは正統派マルクス主義者に位置づけられる人物であり、研究は非弁証法的で機械論的なマルクス主義に立脚した歴史的・経験的研究が中心であったため、理論的諸問題に対しては比較的無関心であった（Jay 1973=1975:9）。グリュンベルクのこの立場は、当時の研究所においては正統派に属するもの（Jay 1973=1975:12）であったが、この考え方はホルクハイマーをはじめとする研究所の若い世代から見ればマルクス主義を思想的に深めてゆくような理論的関心は薄いと思わざるをえない（細見 2014:12）ものであった。その後1929年にグリュンベルクは健康上の理由から所長の座を降りることになるが、研究所の設立当初から重視されていたマルクス主義は、その後も継続して研究所の思想の中心に位置づけられていくこととなる。

## 2.2 ホルクハイマーの2代目所長への就任

1931年に2代目所長に就任したのがマックス・ホルクハイマーである。ホルクハイマーは所長就任講演「社会哲学の現状と社会研究所の任務」（Jay 1973=1975:29）において、カント、ヘーゲルといったこれまでのドイツ観念論の歴史を振り返りながら社会哲学の現状や今後の展望を述べ、研究所の指針を示した（Horkheimer 1931=2018）。

講演の中でホルクハイマーは、社会を個々の関係として捉えようとする実証主義が台頭する時代においても社会哲学は依然として重要であり、（社会）哲学的な理論と経験的な実践・研究とを弁証法的な関係のもとで浸透・進化させていくことを主張した（Horkheimer 1931=2018:117-8）。さらに、ホルクハイマーは社会哲学と経験的な研究を弁証法的な相互関係のもとで検討していくにあたり、社会哲学の古典的な課題である①社会における経済的な生活、②個人の心理的な発達、③文化の特定の領域における変化の3つを、それぞれがどのように関連しあっているのかを見ていくことが重要であるとした。講演の最後には、3つの課題の関連を検討する具体的な方法として、研究所によるリサーチ・プロジェクトを通してドイツの重要な社会集団である熟練労働者とホワイトカラーを対象とした経験的調査を行うことが提案された（Horkheimer 1931=2018:118-9）。

以上をまとめると、フランクフルト学派ではマルクス主義といった社会哲学における重要な思想をその研究の中心に据えつつ、研究方法としては社会哲学の課題を理論的に検討するだけでなく、実際の調査等に基づく経験的研究による検討も重視されていたことが確認できる。

## 3. フランクフルト学派における経験的研究の展開

2代目所長ホルクハイマーによってその重要性が主張された研究所における経験的研究の代表的なプロジェクトとして、就任講演の最後に言及されていた『労働者とホワイトカラーの調査』（Bonss 1980=2016:2）と、研究所のアメリカへの亡命後行われた『権威主義的パーソナリティ』

---

↘ 力』（Jay 1973=1975）に基づくものとする。

の研究（Adorno 1950=1980）が挙げられる。本節ではこれらの研究の系譜を追いながら、フランクフルト学派によって行われた経験的研究の特徴を検討する。

### 3.1 フロムとの共同研究による『労働者とホワイトカラーの調査』

精神分析の研究者として有名なエーリッヒ・フロムは、1929年に研究所に所員として加入した。当時のフランクフルト学派では、「批判的理論」を生成していく過程において、マルクス主義に欠如しているのが心理学的なものであることが指摘されており、それを補うためにフロイトの理論が注目されていた（Jay 1973=1975: 112）。フロムはマルクスとフロイトの思想という一見異質な思想を統合することを、初期に率先して新たな社会心理学として推し進めた（細見 2014: 33-4）。フロムは、社会心理学に関して、「正しい社会心理学は、一つの社会の社会=経済的土台が変化すれば、そのリビドー的構造の社会的機能も変化するということを、認識しなければなら」ず、「このリビドー的構造がどのように社会のセメントとして働くか、またそれはどのように政治的権威に影響するか、を調べなければならない」（Jay 1973=1975: 130-1）と主張した。

このフロムの主導で行われたのが『労働者とホワイトカラーの調査』である。この調査は、1929年から1931年にかけて「ドイツ国民人口の二大グループ、すなわち労働者とホワイトカラーの社会的、心理的態度を調査する最初の試み」（Fromm 1980=2016: 59）として実施され、「意識のあり方を純記述的に把握するだけでなく、精神分析理論の助けを借りて、〈心的装置〉と社会的発展との間に体系的関連があるという証拠を得」ることを目的とした（Bonss 1980=2016: 1-2）。この調査では、271項目から構成されるアンケートを3300人の対象者に配布する形で調査が実施され、政治的・社会的・文化的態度や、パーソナリティ類型との政治的態度の関連を中心に分析が行われた（Fromm 1980=2016）。この調査の結果は、主に人々の政治的、社会的、文化的態度が属性（主に職業的地位や政治的志向）によってどのように異なるのかといった点に注目し説明が行われており、この点から調査全体の関心として人々の心理と属性との関連の検討があったことが確認できる。

なお、この調査の結果は、「公言されている信条とパーソナリティ特性との大きな食い違い」（Jay 1973=1975: 168）といった重要な点を明らかにするものであったにもかかわらず、その当時この研究結果は研究所から発表されないままであった（Jay 1973=1975: 168）。

フロムはその後、経験的調査の評価とフロイト理解をめぐる、研究所の中心的なメンバーであったホルクハイマーやアドルノらとの間に齟齬をきたしたことにより研究所と訣別することとなる（細見 2014: 43）。フロムがフランクフルト学派の一員として取り組んだ研究は多くはないもののフランクフルト学派の経験的研究に対しては、『労働者とホワイトカラーの調査』は重要な役割を果たしたと捉えることができる。

### 3.2 アメリカにおける『権威主義的パーソナリティ』の研究

1930年代中頃からドイツではヒトラーが率いるナチス・ドイツが勢力を増し、メンバーの多くがユダヤ人であったフランクフルト学派はドイツから離れ亡命することを余儀なくされる。その亡命先のひとつであったアメリカにおいても、経験的研究は引き続き取り組まれていた。アメリカで

の代表的な経験的研究に、アドルノとラザースフェルトによる「ラジオ調査プロジェクト」と、アドルノを中心として行われた『権威主義的パーソナリティ』の研究がある（細見 2014: 161-7）。その中でも、成功した経験的研究として位置づけられているのが、『権威主義的パーソナリティ』の研究である（Jay 1973=1975: 327）。

権威主義的パーソナリティの研究は、1940年代初期にカリフォルニア大学バークレイ校を中心に共同研究として実施され、その目的は「反ユダヤ主義と同時に、それを越えたファシズム一般を、純粋に主観的な基盤から解明すること」（Adorno 1969=1973: 54）であった。フランクフルト学派では、この研究以前にも『労働者とホワイトカラーの調査』や『権威と家族に関する研究』をはじめとする権威主義に関する知見が蓄積されており、それらの研究では理論的にはファシズムの支持層となり得ない人々がファシズムを支持するという、正統派マルクス主義の枠組みでは解明できない課題について検討が行われていた（Jay 1973=1975: 163-204）。権威主義的パーソナリティの研究においても、引き続き関心の中心は「ファシズムの潜在基盤」（Adorno 1969=1973: 63）であり、この心理的態度を測定する F-スケールの開発（Adorno 1950=1980）が行われた。しかし、研究の根底にあるファシズムの潜在基盤を解明するという立場はそれまでの研究所と同じであったものの、アメリカへの亡命後の研究では権威主義的パーソナリティの対立軸として「民主主義的」パーソナリティが置かれており（Jay 1973=1975: 331）、そのプロジェクトの置かれた時代や社会の影響を受けて研究の関心も変化していた。

ここまでの内容をまとめると、まずフランクフルト学派の経験的研究を進めるにあたっては、マルクスの思想において下部構造とされた経済的な土台と、上部構造とされる人々の意識・文化との関連を検討することが課題とされており、その点はこれらの経験的研究で人々の心理的な側面と社会との関係を読み解くことを通して検討されていたことが確認できる。また、その人々の意識を捉える際にはフロムによってもたらされたフロイトの思想である心理学が重要な役割を果たしていた。さらに、人々の心理と社会との関連を解明していくにあたって、その関心は各時代や社会における社会問題に向けられており、人々の心理と社会の関連を検討する際の視点も時代や社会に応じて変化していたことが確認できる。

## 4. 戦後日本社会における社会意識論の系譜

### 4.1 日本の社会意識論の位置づけ

フランクフルト学派の経験的研究においては、人々の属性と心理的側面との結びつきを検討することが研究の中心に据えられていた。日本の社会学において、人々の属性と心理的な側面との関係を扱う分野に社会意識論がある。日本では第二次世界大戦後の1950年代頃から社会意識の概念が注目され、これまでに多くの研究が社会意識論において展開されてきた（金 2012）。社会意識論の代表的な研究者である見田宗介は、社会意識の概念を次のように定義している。

社会意識とは、さまざまな階級・階層・民族・世代その他の社会集団が、それぞれの存在諸条件に規定されつつ形成し、それぞれの存在諸条件を維持し、あるいは変革するための力として

作用するものとしての、精神的諸過程と諸形象である。社会意識論は、このような社会意識の構造と機能、その形成と展開と止揚の過程を、経験的かつ理論的に研究することをその課題としている（見田 1979: 101-2）

見田は、この定義において階級や階層といった、各社会集団の存在条件に規定されるものとして社会意識を捉えている。この階級や階層に意識が規定されるという点は、階級という経済的な下部構造が意識という上部構造を規定するとしたマルクス主義の思想が踏まえられていることが確認できる（吉川 1998: 28-9, 金 2012）。さらに、見田は社会意識を「存在諸条件を維持し、あるいは変革するための力」として位置づけている。この点は、マルクス主義の中でも正統派マルクス主義の経済的な構造が一方的に意識や文化といった上部構造に影響を与えるという図式に対して、意識や文化といった上部構造が、それぞれの存在諸条件である階級・階層をはじめとする社会構造を変革する可能性を持つことが反映されており、この点は、意識や文化が経済をはじめとする社会構造を変革する可能性を追求していたフランクフルト学派と同じ立場であると考えられる。

次に、見田は社会意識論の手法として、「社会意識論とはこのように、社会的存在としての人間の被規定性と主体性——歴史の必然と人間の自由——の弁証法的に交錯する現実の深部の構造を、実証科学の武器をもって開鑿する企て」（見田 1979: 102）としており、研究手法としては実証的な方法が想定されている。

ここで日本の社会意識論と、フランクフルト学派における経験的研究の位置づけを比較すると、以下の共通点があることが確認できる。1 点目は、マルクス主義を理論の中心に据えていることである。マルクス主義における下部構造と上部構造の関係、さらに、その下部構造と上部構造を捉える際の弁証法的な関係にあるとの位置づけが共通していることが確認できる。2 点目は、人々の心理や意識と属性といった社会構造との関連を検討していく手法として、両者とも実証的<sup>2)</sup>な方法が提唱されている点である。両者とも単に理論的に研究課題を検討するだけでなく、データに基づく実証的な研究を行うことを重視している。以上の点を踏まえると、フランクフルト学派の経験的研究と日本の社会意識論との間に連続性があると理解することには、一定の妥当性があると考えられる。

#### 4.2 社会意識論における権威主義研究

日本の社会意識論は、社会における人々の主観的な位置を尋ねる階層帰属意識をはじめとして、社会調査データに基づく計量的な研究を中心に展開されてきた。

日本の社会意識論において、長年に渡り検討されてきた項目のひとつに権威主義に関する項目がある。権威主義に関する研究は、ホルクハイマーやフロム、アドルノを中心としたフランクフルト学派のメンバーによって研究が蓄積されてきた領域であり、日本においてもアドルノらによって提

---

2) 日本の社会意識論における「実証的」は、理論的な研究との対比でデータを用いた検討を行う研究との意味で用いられている。そのため、フランクフルト学派で言及されていた経験的研究と、社会意識論の実証的研究は、完全に同じ立場ではないものの、データに基づく研究を展開するという点は共通している捉えることができる。

唱された指標を用いて人々の権威主義の度合いが測定されてきた。

例えば、城戸らによって行われた研究では、1950年代の戦後日本社会において、権威主義的とされる伝統的価値体系と民主主義的・社会主義的なイデオロギーの関連を探ることによって、その当時の日本社会の置かれた状況を理解することが目指されていた（城戸・杉1954）。また、吉川は、権威主義的性格を自己－指令的指向性の観点から捉え直すことによって、その時代における社会の人々の意識を解明することを試みた（吉川1998）。これらの点は、フランクフルト学派にも見られた人々の心理に関する経験的研究が、各時代の社会状況を読み解くという課題に取り組もうとしていた点と共通すると捉えられる。

また、権威主義的態度は、その態度をどのような人々が持つのかという点から、社会階層との関連についても研究が行われてきた（直井1988、轟1998他）。それらの研究では、社会階層といった人々の属性と権威主義的態度の関係が検討されており、この点はフランクフルト学派の経験的研究が課題としていた人々の心理と属性といった社会との結びつきを検討していると捉えられる。以上の点から、フランクフルト学派の経験的研究の立場は、日本の社会意識論における権威主義に関する研究でも引き継がれていることが確認できる。

## 5. 社会意識としての承認の可能性

これまでの日本の社会意識論、とりわけ計量的な手法による研究では、階層帰属意識や権威主義的性格をはじめとして多くの研究知見が蓄積されてきた。しかし、近年は集団全体を捉える社会意識の不在や階層変数の規定力の低下など、従来の社会意識論で検討されてきた研究課題の今後が見通しにくくなっていることが指摘されている（吉川2015）。このような状況においては、現代社会に生きる人々の社会意識を捉えるために、これまでは目を向けられてこなかった領域にも視野を広げることが、有効な手段のひとつとなると考えられる。

2000年代終盤から、日本社会では人々の孤立の問題など、人間関係に関する問題が注目されており、その人間関係の問題のひとつとして承認が重要な課題となっている。

承認は、日本の社会意識論においても社会構造との関係が議論されてきた。大澤真幸は、見田宗介の『まなざしの地獄』を取り上げ、1960年代の都市に暮らす若者は他者からのまなざしが多すぎるのが生きづらさにつながっていることを指摘する一方で、2008年に発生した秋葉原無差別殺傷事件を例として取り上げ、2000年代後半の若者の生きづらさは誰からもまなざされないことであると指摘した（大澤2008）。この承認の過剰から承認の欠如への変化の背後には、日本社会における人間関係の変化があることが言及されている（大澤2008）。この承認を捉える際の視点は、各時代における人々を取り巻く人間関係といった社会構造の影響を受けており、この点を踏まえると承認に関する意識は社会構造との関連を視野に入れたうえで検討すべき課題と位置づけることができる。現代社会における承認への注目と、承認と社会構造との関連についての議論を踏まえると、承認を社会意識として位置づけ、そのあり方を検討することは、現代日本社会の社会意識を明らかにするための視座となり得ると考えられる。

一方で、承認は1990年代初頭から欧米圏の社会哲学でも現代社会を捉えるための重要な概念と

して注目を集めてきた。フランクフルト学派の第3世代とされるアクセル・ホネットは、承認を人間学の観点から現代社会で生きるすべての人に関わる問題として捉え、承認論を展開した（ホネット 2003）。ホネットは、自身の承認論をフランクフルト学派の第2世代とされるハーバーマスの展開したコミュニケーションパラダイムに基づく批判的社会理論を継承する立場から展開しており（水上 2003: 153）、その承認論にはフランクフルト学派の思想が踏襲されていることが確認できる。ホネットが社会哲学の視点から承認の重要性に注目している点は、承認をめぐる問題が現代社会で解明すべき重要な課題であることをさらに裏付けていると捉えられる。

ホネットは承認論において承認を間主観的なものと捉えており、それは他者との相互行為を通して成り立つことを強調している（Honneth 1992=2014）。また、自身の承認論は人びとの具体的経験に根ざした形での展開を目指すことも主張している（ホネット 2003）。以上の点から、ホネットは承認を、間主観的、すなわち人々の心理・意識の次元において経験されるものと捉え、また、具体的な経験に根ざすといった点を重視していることから、承認をめぐる問題は人々が日常的に意識する機会も多い問題であると考えられる。以上の点からも、人々が承認をどのように意識しているのかという社会意識の点から承認を検討することは、現代社会の社会意識を捉える重要な視点となり得ると考えられる。

ここまで検討してきたように、社会意識論とフランクフルト学派それぞれにおいて承認は注目されているものの、ホネットによる承認論の経験的研究や、社会意識論における承認をテーマとした実証的研究といった試みはほとんどなされていない。現代におけるフランクフルト学派の思想は、その思想や理論の有効性に注目した研究が中心を占めているが、本稿で取り上げたように、初期のフランクフルト学派においては、社会哲学と経験的研究の両者を弁証法的な相互作用の中で進めていくとの方針が共有されていた。一方で、日本の社会意識論では、社会構造と人々の意識との相互作用を、実証的な手法によって検討していくことが主張されていた。以上の点を踏まえると、ホネットの承認論を調査データ等に基づく実証的な研究を用いて検討することは、妥当であると考えられる。近年そのつながりがあり強く意識されてこなかったフランクフルト学派と社会意識論の両分野を横断し、承認に関する実証的研究<sup>3)</sup>を行うことによって、現代日本の社会意識に関する新たな知見を得ることが求められる。

#### 参考文献

- Adorno, T. W., Else, Frenkel-Brunswick, Daniel, J. Levinson and R. Nevitt Sanford, 1950, *The Authoritarian Personality*, New York: Harper & Brothers. (= 田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳, 1980, 『権威主義的パーソナリティ』青木書店.)
- Adorno, T. W., 1969, "Scientific Experiences of a European Scholar in America", Donald, Fleming, and Bernard, Bailyn, 1969, *The Intellectual Migration: Europe and America, 1930-1960*, Massachusetts: Harvard University Press. (= 荒山幾男・山口節郎・近藤邦夫・今防人共訳, 1973, 『亡命の現代史4 社会学者・心理学者』

3) 日本において、フランクフルト学派の理論的文脈と、社会調査データによる実証的研究を試みた研究として保坂（2003）がある。保坂は、権威主義的性格に着目し、フランクフルト学派によって検討されてきた家族や政治参加、自然との関係を質問紙調査によって収集したデータを用い実証的に検討している（保坂 2003）。



みすず書房, 25-76.)

Bonss, Wolfgang, 1980, "Introduction", Fromm, Erich, [1929] 1980, *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reiches: Eine Sozialpsychologische Untersuchung*, Stuttgart: Deutsche Verlagsanstalt. (=佐野哲郎・佐野五郎訳, 2016, 『ワイマールからヒトラーへ——第二次大戦前のドイツの労働者とホワイトカラー〈新装版〉』紀伊国屋書店.)

Fromm, Erich, [1929] 1980, *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reiches: Eine Sozialpsychologische Untersuchung*, Stuttgart: Deutsche Verlagsanstalt. (=佐野哲郎・佐野五郎訳, 2016, 『ワイマールからヒトラーへ——第二次大戦前のドイツの労働者とホワイトカラー〈新装版〉』紀伊国屋書店.)

藤野寛, 2012, 「フランクフルト学派」見田宗介編『現代社会学事典』弘文堂, 1111.

Honneth, Axel, [1992] 2003, *Kampf um Anerkennung: Zur Moralischen Grammatik Sozialer Konflikte*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag. (=山本啓・直江清隆訳, 2014, 『承認をめぐる闘争——社会的コンフリクトの道徳的文法〔増補版〕』法政大学出版局.)

ホネット, アクセル, ・日暮雅夫・岩崎稔, 2003, 「批判的社会理論の承認論的転回——アクセル・ホネットへのインタビュー——」永井彰・日暮雅夫編著『批判的社会理論の現在』晃洋書房, 177-221.

Horkheimer, Max, 2018, "The State of Contemporary Social Philosophy and The Tasks of an Institute for Social Research (1931)", *Journal for Cultural Research*, 22(2): 113-121.

保坂稔, 2003, 『現代社会と権威主義——フランクフルト学派権威論の再構成』東信堂.

細見和之, 2014, 『フランクフルト学派——ホルクハイマー、アドルノから21世紀の「批判理論」へ』中央公論新社.

Jay, Martin, 1973, *The Dialectical Imagination: A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Boston: Little Brown and Company. (=荒川幾男訳, 1975, 『弁証法的想像力』みすず書房.)

城戸浩太郎・杉政孝, 1954, 「社会意識の構造——東京都における社会的成層と社会意識の調査研究(三)——」『社会学評論』4(1-2): 74-100.

吉川徹, 1998, 『階層・教育と社会意識の形成——社会意識論の磁界』ミネルヴァ書房.

——, 2015, 「第8章 階層意識の学歴差を考える——社会意識の再埋め込み」数土直紀編『社会意識からみた日本——階層意識の新次元』有斐閣, 229-255.

金明秀, 2012, 「社会意識」見田宗介編『現代社会学事典』弘文堂, 562-563.

水上英徳, 2003, 「第七章 批判的社会理論における承認論の課題——ハーバーマスとホネット——」永井彰・日暮雅夫編著『批判的社会理論の現在』晃洋書房, 153-176.

見田宗介, 1979, 『現代社会の社会意識』弘文堂.

直井道子, 1988, 「職業階層と権威主義的価値意識」原純輔編『1985年社会階層と社会移動全国調査報告書第2巻階層意識の動態』1985年社会階層と社会移動全国調査委員会: 225-242.

大澤真幸・平野啓一郎・本田由紀, 2008, 「座談会〈承認〉を渴望する時代の中で」大澤真幸編『アキハバラ発——〈00年代〉への問い』岩波書店, 212-234.

轟亮, 1998, 「権威主義的態度と現代の社会階層」間々田孝夫編『現代日本の階層意識』(1995年SSM調査シリーズ6)1995年SSM調査研究会: 65-87.